

法華宗綱要
く、千劫阿鼻の苦を免るへからさるなり

法華宗綱要終

法華宗綱要附録 三國佛教傳通畧

我が法華宗の起原は、遠く久遠實成道の釋迦牟尼佛より、傳承せる所にして、往昔釋尊印度に降誕し、法華經を説て本眷屬を召し、本法を付囑して、末法今日の導師と定め給ふ、是則ち本邦の日蓮聖人、其本化上行菩薩の再誕として、塔中直受の法華宗を、弘通し給ふ所なるか故に、今や法華宗綱要を編纂するに中ては、先づ釋尊の出世成道より説起して、一代五十年説法布化の相を明にし、次て佛滅後三時四依の弘法を叙述して、色經の支那朝鮮を経て、本邦に傳來したる梗概を明示し、且つ其間各宗興亡の跡を糾して、宗教五箇の規矩を明め、而して禮樂先驅眞道後啓の準繩に依て、世尊法久後要當説眞實の、吾か法華宗に結歸せしむるか、編輯の順序なれど

も、其等の事跡は徧く諸書に出在せるを以て、今は但繁を避けて簡を貴ひ、咸く畧して述せず、然も餘經餘宗を弘むるには、省略失なりと雖も、若し法華を弘むるには、徧く一切を明かさゝれば、義意闕るとあるを以て、其旨趣自から前後の文中に含容蘊在せり、故に本書一部を通讀すれば、自から釋尊一代の化導の大綱に通じ、併せて滅後三時の宗教の興廢如何をも證知するを得ん、依て今茲に三國佛教傳通の大畧を誌して、學者の參考に供せんとす

先づ印度の興替を擧れば、神武天皇紀元前三百六十七年西洋紀元前一千二十七年支那周昭王二十六年甲寅四月八日に、釋尊印度に降誕し、十九出家三志成道の後、四十餘年の間、華嚴、阿含、方等、般若等の、諸部の大小乘經を説て、普く五天に往來遊化し給ふ、是則一切衆生の機

根を調へて、後に眞實内證の法華に引入するの方便經なり、佛壽七十二歳、初て最勝眞實の法華經を説出し、出世の本懷を暢へ、以て三説超過の法華宗を建立し給ふ、尋て迹門半分の法華經をは、迹化藥王等に付囑し、本門全分の法華經をは、本化上行等に付囑し給へり、此説相約八箇年、佛壽七十九歳に於て、重ねて法華同味の涅槃經を説て入滅し給ふ、即ち神武紀元前二百八十九年西洋紀元前九百四十九年支那周穆王五十二年壬申二月十五日なり、因に謂ふ、釋尊降誕入滅の年代、古來四十八家の異説あれども、今は且く本邦舊來の相傳に據る、各宗派概ね此の説に従ふ

佛の滅後、遺弟等法寶の散逸を恐れ、結集の事に従ふ、結集に大小二乘の別あり、小乘中、亦上座、大衆の異あり、上座部は、大

迦葉上座に在て、阿難陀、優婆離等の五百人、王舍城の窟内に
 三藏經律を結集し、大衆部は、婆師伽等、更に窟外に於て五藏
經律論を結集す、次に大乘は、阿難、文殊、彌勒等、別に諸大乘經
 を結集せりと云ふ、結集既に成り、迦葉、阿難、末田地、商那和須、
 優婆嚧多の五師面受瀉瓶す、是を異世の五師と云ふ、就中優
 婆嚧多は、滅後百年の終に出興し、曇無德等の上足五人を有
 す、各々所見を異にし、遂に五部の律と爲る、是を同世の五師
 と云ふ、尋て二百年の初め、大天五事の說興り、上座大衆の分
 派を見る、後三四百年の間、二部次第に分裂して、大衆に九部
 を出し、上座に十一部を出す、是を小乗の二十部と云ふ、就中
 薩婆多部を以て最盛と爲す、五百年に至ては、小乗教稍衰頽
 し、婆羅門教徐く萌芽を生ず、以上佛滅後約五百年の間は、小

乘繁興の時代にして、大乘は未だ發達の運に至らざりしなり
 佛滅後六百年に至て、馬鳴菩薩出て起信論を著し、大乘の法
 門是より勃興す、七百年に龍樹大士興り、大智度論を著し、益
 す大乘の法門を顯揚す、故に佛法の中興八宗の大祖と稱す、
 其門下に俊傑二人あり、謂く龍智、提婆と云ふ、共に破邪顯正
 に力む、九百年に、無著、天親の二論師出て、共に大乘を弘宣す、
 無著は彌勒菩薩に乞て瑜伽論を説き、天親は千部の論師と
 稱せられ、法華論、涅槃論、佛性論等を著す、而も未だ其義を盡
 さず、故に龍樹天親内鑿冷然と云ふ、凡そ大乘の興隆は實に
 龍、天二師の威力に憑る、以上約五百年の間は、法華經より外
 の、般若方等等の權大乘の法門、最も旺盛の期運なり、滅後一

千百年の頃、護法、清辨の二論師出て、空、有、二宗の諍を爲す、後世唐の玄奘、渡天の時に方て、戒賢、智光の二師あり、戒賢は護法に承て有宗を弘め、智光は清辨より傳へて空宗を宣ふ、爾來印度の佛教は、唯此二宗に止りて多途あるとなし、斯の如く大乘分派して、空有相諍ふのみならず、後四五百年間に至て、更に大小乗の鬭争、恰も水火の如くなるあり、此虚に乗して、婆羅門教徒益す權勢を回復し、荐りに我か法城を滅せんと謀り、遂に佛日西山に傾くの悲境に陥れり、後復三四百年に及んで、土耳其、阿拉非亞の回教徒、印度に進入し、大に猖獗を逞うし、佛教遂に本土を去て、東北諸方に向ふ、其印度に留まる所のものは、僅に南方錫崙嶼、及雪山の麓、不丹、尼泊尔、迦濕彌留等の數國のみ、是れ印度佛教傳通の概畧なり

次に支那傳通の大畧を述べ、佛滅後一千十六年、神武紀元年即ち垂仁天皇即位九十六年、西後漢の明帝永平十年に、佛教甫て支那に入ると、明帝初め夢感ありて、郎中蔡愔、博士秦景等を、天竺に遣し法を求めしむ、遂に摩騰、法蘭の、佛像經卷を白馬に馱して來るに逢ふ、遂に相伴ひ還る、爾來一瀉千里の勢を以て、姚秦、蕭梁の世に盛んに、李唐、趙宋の代に頗る浩渺を極め、而して元、明に逮て、沈瀾の狀を呈し、清に至ては、頽瀾殆ど絶たるか如し

蓋し騰蘭の渡東以來、元の代に至るまで、新舊傳譯の盛なるを、支謙、安世高、支婁迦讖、康僧鎧、羅什、法顯、玄奘、義淨等の譯者、接踵輩出し、三藏の翻譯、概ね六千七百餘卷、今依明藏に及へり、就中羅什三藏は、舌根不燒の徳ありて、翻譯の誤なきこと、特に

群に秀たり、而して此間興る所の宗派は、即ち三論、成實、涅槃、地論、淨土、禪、攝論、天台、華嚴、法相、毘曇、律、真言等の十三宗あり。皆唐宋以前の教派たり、三論宗は、姚秦、弘始中、羅什、中論、百論、十二門論の三論を譯し、道生、僧肇、道融、僧叡等之を講し、隨の嘉祥に至て大成す、成實宗は、羅什、成實論を譯し、後人多く之を講す、涅槃宗は、北凉、元始中、曇無讖、涅槃經を譯し、宋の慧觀之を講す、地論宗は、北魏、永平中、菩提流支、十地論を譯し、後人多く之を講す、淨土宗は、北魏の曇鸞、菩提流支に逢て之を傳へ、唐の道綽、善導に至て大成す、禪宗は、梁の大通元年、達磨西來して之を慧可に傳へ、僧璨、道信、弘忍等、次て之を承く、弘忍の後分れて、南北二宗となり、又分れて五派と爲る、所謂る、臨濟、沩仰、曹洞、雲門、法眼なり、又臨濟の下に、楊岐、黃龍の二派を

出す、攝論宗は、陳の天嘉中、眞諦、攝大乘論を譯し、後人多く之を講す、天台宗は、北齊、天保二年、慧文禪師、法華に依て大悟するに基因し、慧思之を繼ぎ、天台智者に至て初て大成す、華嚴宗は、東晉、義熙中、覺賢、六十華嚴を譯し、陳の杜順之を講し、智儼之を繼ぎ、法藏に至て大成す、法相宗は、唐の貞觀中、玄奘の上足慈恩、大に之を起す、毘曇宗は、東晉、太元中、僧伽提婆、法勝、毘曇を譯し、後之を講する者あり、然も其盛を致すは、唐の玄奘、俱舍、婆沙等を譯せるに憑る、律宗は、姚秦、弘始中、佛陀耶舍、四分律を譯し、唐に至て、法礪、道宣、懷素、之を釋す、就中南山道宣律師を以て標準とす、眞言宗は、唐の開元中、善無畏、來て之を開き、金剛智、不空、之を繼承す、案するに、佛教東漸以後三百年間は、傳譯の業を主として、當

時大乘の經論なきにあらざれども、未だ宣通するに至らず、東晋の代に至りて、道安、慧遠、僅に其端を啓き羅什三藏に及て大乘始て蔚興す、尋て梁に至りて眞諦三藏起信論を譯出し、眞如隨緣の説行はれ、同時に禪學の興隆を見る、尋て陳隋の代に天台智者大師出現し、二國の帝師として、廣く南三北七の異義を破し、大に法華圓頓の妙旨を開闡す、實に佛滅後一千五百餘年なり、又唐の初め、玄奘三藏西域より歸り、大に新譯の經論を出し、教風茲に一變す、而して其盛を極むるものは法相宗なり、其後中唐に光揚せしを眞言家とす、尋て又妙樂大師出て、大に天台の教觀を振興せり、是を佛滅後千七百年代とす、斯く法運の興隆せしにも拘らず、其間復屢否塞の厄難に遭遇せり、彼三武一宗魏の大武帝北周の武帝、唐の武宗後周の世宗の排毀の如き

は、其甚しきものなり、然りと雖も、眞乘の金山隨て磨すれば隨て耀き、益す其光彩を發するに至る、大凡唐宋の世に諸宗の蔚興せしは、蓋し其反動なるへし、大集の多造塔寺の時期、其識文實に虚しからざるなり、降て元明の世に逮ては、更に喇嘛教の弘通あり、是より舊宗振はず、尋て清朝に至りて、其教最も行はる、蓋し喇嘛は、西藏傳來の大乘にして、即ち密教の一部なり、其教風は唯禁咒祈禱を事とするのみ、唐の太宗の時始て之を興じ、明に至りて更に一派を開く、是より二派となり、舊派を紅教とし、新派を黃教とす、是れ服色に由りて名とするのみ、以上は支那佛教傳通の概畧なり、朝鮮は、本邦佛教の宗國なるを以て、往時各宗教の繁盛なりしを推知すへし、然るに現今は、法威國運と共に振はず、僅に

天台華嚴禪淨土の諸宗を存すれども、世道人心を制御するの力なく、殆ど有名無實の状況なり

次に本邦の傳通を畧叙せば、佛滅後一千五百一年、神武紀元二千二百十二年西洋紀元五百五十二年、欽明天皇十三年十月、百濟國聖明王、佛像經卷等を貢獻す、是れ本邦佛教傳弘の始なり、當時物部中臣等、抗議

反論甚しきにも拘らず、聖德太子出るに及んで、萬世經綸の宏圖を披き、凡百の制規を興創し、特に篤敬三寶を以て國憲

の第一となし、王侯庶民齊しく之を崇奉すへきの龜鑑を示せり、爾來續々宗教の渡來すると、宛も水の下さに就くか如

し、即ち推古天皇三十三年、高麗僧慧灌、來て三論宗を開き、同時に成實宗を渡す、孝德天皇の白雉四年、道昭入唐して

法相宗を渡す、是を法相の第一傳とす、同時に俱舍宗傳來せ

り、其後法相は智通智達の入唐を第二傳とし、智鳳智鸞を第三傳とし、玄昉を第四傳とす、聖武天皇の天平八年、唐僧道

璿、來て華嚴宗を開き、良辨時に審祥を請いて之を東大寺に講せしむ、孝謙天皇の天平勝寶六年、唐僧鑒眞、來て律宗を

傳ふ、以上是を南都六宗と云ふ、後天台宗興るに及て、宗名は悉く斷絶せしむ、教風は僅に南都に繼續せり、而して明治の

近代に至り、法相宗は十五年六月に、華嚴宗は十九年六月に、再ひ宗名を公稱せり

桓武天皇の延暦七年、最澄傳教大師、比叡山を建立し、天台宗を開創す、實に佛滅後一千七百三十七年なり、本邦天台宗教の傳流は曩に聖德太子

南岳の後身として法華經を註釋弘通し尋て鑿真和尚天台の法孫と尋て同二十三年奉勅入唐し、正しく道窻、行滿二師に、天台の秘璽

を稟け、傍ら順曉に密教を、備然に禪法を、道邃に菩薩戒を受
け、翌二十四年歸朝せり、所傳の經書二百三十部に及ぶと云
ふ、然も其宗とする所は、獨り天台の法華に在るか故に、天台
法華宗と唱へ、餘は附屬として宗名を附せず、天皇即ち勅し
て曰く、大唐受法最澄阿闍梨、將來する所の天台教、天下に流
通すべしと云云、又著書數十部あり、普く前代諸宗の異義を
倒して、日本一州圓機純一ならしむ、其後圓仁慈覺大師、承和
五年に入唐して、更に圓密禪等を傳へ、又圓珍智證大師、仁壽
三年に入唐して、將來の書疏等頗る多し、而も慈覺は傳教の
上足にして、叡岳第三座主を襲ひ、智證は義眞(叡山第二座主
なり、傳教に従て入唐し、譯語の僧たり)の上足にして、三井寺
を開く、本邦の天台圓宗、此二師より圓密禪戒の四宗雜亂、權

實混同の宗となれり、是れ一は眞言の開宗あるに依り、一は
入唐の相承ありしに依れり、嗚呼此權門、後世他の爲に擴張
せられて、融通念佛となり、淨土となり、禪宗となり、又眞宗と
なりて顯るゝに至る、寔に歎すへきなり、後延喜年中に、良源
慈慧大師あり、本宗の中興と稱す、其上足中、源信、覺運の二人
學業秀逸なり、之を慧信、檀那の二流と云ふ、又空海弘法大師
あり、傳教と同時に入唐して、金胎兩部の祕法を傳受し、大同
元年歸朝の後、眞言宗を弘め、高野山等を開く
以上の八宗は、皆是れ像法時代に興立せる宗なり、當時歴代
天皇の尊信篤さを以て、佛教頗る隆盛の域に達せり、然も盛
運却て衰命を招き、後世、或は驕傲兵を弄し、或は風流世を玩
ふ、等の弊風を生ず、此機に乗して、末法の始に新宗の續々勃

興するを見る、謂く融通念佛、淨土、禪、眞宗等なり、融通念佛は、鳥羽天皇の永久五年、入末法十六年、良忍聖應大師、本佛彌陀直授と號して之を唱ふ、正依は、華嚴法華、傍依は淨土三部なり、後淨土の一派に屬し、明治七年二月、方て宗名を公稱す、淨土宗は、高倉天皇の承安五年、入末法二十四年、源空圓光大師之を開き、選擇集等を作て、捨閉闢拋の謗言を専らにす、門人鎮西の聖光、西山の善慧、其の頭角たり、禪宗は、後鳥羽天皇の建久二年、入末法四十年、榮西千光國師、宋より歸朝して之を弘め、教外別傳と立て、佛を蔑り法を毀る、後建仁寺を建つ、是を本邦臨濟宗の始とす、尋て建長寺道隆、東福寺圓爾、圓覺寺祖元、南禪寺普門、大德寺妙超、妙心寺慧玄、天龍寺疎石、永源寺源光、相國寺妙苑等、各王公武相の歸依を受け、創寺開派す、又、四條天皇の天

福元年、道元承陽大師、興聖寺を創し、曹洞宗を開く、後永平寺を建つ、道元四世の法孫を、紹璣圓明國師と云、後醍醐天皇の歸依を受けて總持寺を開く、眞宗は、後堀河天皇の元仁元年、入末法七十三年、親鸞見眞大師之を弘む、鸞本源空の弟子たり、故に從來淨土新宗と號し、又は一向宗と稱す、後十派に分る、而も宗意安心は異なり

斯の如く新宗の興立するに中て、念佛眞言禪律の確執彌よ甚しく、互に驕慢の瞳を高くし、各是非の争を増し、小を以て大を破し、權を執して實を謗す、大集の闢諍言、訟白法隱没の金言、實に虚しからざるなり、此時日蓮大聖人世に出現して、偏に時機相應の妙法蓮華經宗を開闡し、信謗二機に成佛の大縁を結はり、後五百歳の迷闇を破し給ふ、實に、後深

草天皇の建長五年四月二十八日に於て、佛滅後二千二百二年神武紀元一千九百五十三年なり、而して此以後に興りしは、時宗、黄檗宗とす、時宗は 後宇多天皇の建治元年、入末法二百一十四年 圓照大師、熊野に參籠して神勅を感じ、之を創むと云ふ、其の本願念佛の旨趣、及所依の經論は、畧淨土に同じ、又黄檗宗は 後光明天皇の承應三年、入末法六百三年 臨濟下の隱元、清より歸化して、黄檗山萬福寺を創せしに始まる、其宗義は臨濟と異ならず、又維新前、修驗宗なる一流あり、元祖は役の小角にして、天智天皇の時之を創む、後天台眞言に屬し、明治の初に至て跡を絶つ、以上本邦佛教傳通の概畧なり

夫れ釋尊は、一代五十年、時を待ち機を待て、最後に出世の本懷たる妙法を宣説し、滅度に入り給ふ、爾より以來、法を四依

に付し、遠く滅後三時の機を益せり、所謂る五箇の五百歳に、小乘權大乘實大乘迹門本門と、順次時機相應の弘法ある是なり、茲に於て學者須く知るへし、前來畧述せる三國佛教傳通の實蹟に就て、佛日全く西山に傾き、遺耀正しく本邦に留まり、特に正像二千年の待時待機の祕法たる、先聖未發の法華經を、尊無過上の最後の法寶として、吾宗祖聖人之を末法の初に唱導弘通し給ひ、尙遠く萬年の外未來までも、此宗を流布せしめ、此後更に餘教餘宗の弘布あるとなく、一天四海皆妙法に歸し、後五百歳中廣宣流布於閻浮提無令斷絶の金文に契ひ、佛祖の本懷も斯に満足し、教法の流通も茲に究盡せりと云ふとを、是則ち佛日初て東天に現し、餘光反て西洲に逮ふの時運と謂へさむの歟、冀くは本宗の緇素、宜く之を

努力へし、須く之を勵むべし

法華宗綱要附錄終

明治三十四年四月三十日印刷
明治三十四年五月廿五日發行

定價金七拾錢

編纂者

三澤 檀林

神奈川縣橫濱市青木町

印刷者

積山 之和

東京市本所區外手町三十八番地

發行者

富山縣士族

塚田 光淳

東京市本郷區菊坂町八十七番地

印刷所

八尾活版所

東京市神田區錦町三丁目八番地

187

193

187
193

